

『賢者ナータン』の三つの指輪の話に表れた

レッシングの思想 (その一)

太 田 伸 広

要旨 レッシングのドラマ『賢者ナータン』の三つの指輪の話をボッカチオの『デカメロン』の三つの指輪の話と比較すると、キリスト教に対するレッシングに固有な批判、彼独自の思想が明らかになる。それは、神を客体化し、人間を主体にした思想、つまり、神が人間を助け、恩恵を施し、奇跡を行なうのではなく、人間が神の力の顕現を助長し、神をして、神を媒介として、人間に恩恵を施し、奇跡を行なうということ、人間の神に対する愛や神の人間に対する愛ではなく、人間の人間に対する愛こそが、根本であり、かつ重要であること、神の力、宗教の力、信仰の力が人間を善にするのではなく、人間の善に向けての、人間の理性の発展に向けての、無限の努力が人間を善にすること、それこそが人間にとって最も大切であること、一言で言えば、神が主で、人間が従なのではなく、人間が主で、神が従であるという思想であり、キリスト教からの人間の理性の解放の過程、神学の立場における神学の否定、神の人間化の過程、ドイツ古典哲学を経て、フォイアーバハの宗教批判によって完結する、ドイツの宗教批判の歴史的発展過程の中に、重要な位置——それも非常に初期の段階で——を占めるものである。

序

レッシング(1729年1月22日～1781年2月15日)の最晩年(1779年4月末)における、最後のドラマ『賢者ナータン、五幕の劇詩』(„Nathan der Weise. Ein dramatisches Gedicht in fünf Aufzügen“)(注1)は、ゲーテが「悟性がほとんど一人でしゃべっている」(1)と述べているように、形象化されてはいるものの、宗教思想そのものをストレートに展開した、露骨な思想作品である。事実、『賢者ナータン』は、生涯にわたってキリスト教と神学に取り組んだ人が、晩年の神学論争を契機として完成させた、自己自身の宗教思想の総決算である。したがって、それは、極めて難解であると同時に、思想的に極めて内容に富む作品となっている。おそらく、それは、われわれに慎重な取り扱い方を要求し、単純な、一面的な解釈を許さない作品であろう。

しかし、『賢者ナータン』は、一般的には、単に寛容の思想をテーマとしたもの、寛容の思想を展開したものとして、理解されている。殆どすべての研究者、専門家の理解、主張、見解もそうである。それは確かに誤りではないが、ただそれだけのものとして理解される場合には、あるいは、寛容の概念が単独に、孤立して理解される場合には——既存の宗教に対するレッシングの対決、闘争という関係において見られる場合でさえも——それは内容の極めて乏しいもの、そういう意味で、誤ったものとなるであろう。それは、せいぜいのところ、ラヴォアジエ(Sauerstoff)に対するブリーストリ(dephlogistisierte Luft)とシェーレ(Feuerluft)の役割に過ぎないであろう。たとえ「是認(Geltenlassen)、承認(Anerkennen)を意味する忍耐(=寛容)(Duldung)以上の意味を持っている寛容(Toleranz)」(2)と述べ

て、日本語の寛容という概念に相当する二つのドイツ語、すなわち *Duldung* と *Toleranz* —— 普通、レッシングの寛容の概念を表すのに、ドイツの文献でも、実際にこの二つのドイツ語がさしたる区別もなく用いられている —— をわざわざ区別して、*Toleranz* に特別の意味付与をしようとも、事柄の本質は何ら変わらない。

レッシングが寛容の思想を抱いていたことは事実であるが、それと同時に、彼は、そこにとどまることなく、思想的にさらに一歩先へ進んでいる。私の考えでは、彼の思想的発展のコンテクストの中で、彼の思想全体の中で、反省された寛容の思想が、彼の真の寛容の概念である。人類の教育の幼年期としてのユダヤ教＝旧約聖書の時代、人類の教育の青年期としてのキリスト教＝新約聖書の時代、人類の教育の最高段階としての理性の王国＝聖書も宗教も不要の時代という三つの段階を経て発展するとされる人類の歴史的発展、特に類としての理性の発展を展望したうえで、既成宗教に対するレッシングの寛容の概念は、極めて積極的で、規定の豊かな概念である。このレッシングの寛容の概念を、更に一歩進めて、ドイツ思想史の発展全体の中に位置付けて、捉える必要があろう。

そして寛容の概念の再検討とは別に、『賢者ナータン』が単に寛容思想を展開したものとして、理解されているものかどうか検討する必要がある。彼の思想は、単なる寛容の思想よりも深く鋭い。

『賢者ナータン』は、それにふさわしい取り扱い方をわれわれに要求している。この作品が、『人類の教育』、『反ゲーツェ』論と三位一体をなした、レッシングの最晩年における思想的総括だからである。しかし、理由はそれだけではない。その後のドイツにおける巨大で偉大な思想的発展があるからでもある。したがって、レッシングをドイツの思想史の発展全体(注2)の中に位置付けて捉えること、『賢者ナータン』をレッシングの思想的発展の中に位置付けて捉えること、そして『賢者ナータン』の個々の部分的諸問題を全体から切り離して研究するのではなく、『賢者ナータン』を総体として研究することが必要であろう。

逆に、『賢者ナータン』に的を絞る、その総体を扱うにしても、『賢者ナータン』のテーマ、個々の部分的諸問題の研究はもちろんのこと、その他に、このドラマと他の諸作品との関係、レッシングの生涯におけるこのドラマの位置、ドラマの誕生の経緯とその時代的、個人的背景、レッシングの思想的発展全体(文学、宗教、哲学、等すべての面から)の研究が不可欠であり、そして、さらに、旧約聖書、新約聖書をはじめユダヤ教、キリスト教、イスラム教、西洋の宗教史、特にキリスト教の歴史、ドイツはもちろんのこと、西洋の社会、政治、経済、文化全体の歴史、なかでも西洋の、特にドイツの思想史の発展、文学史、等々の研究が、『賢者ナータン』の研究の前提として、その文学的研究の素養として、要求されるであろう。

全体から始めても、部分から始めても、結果は同じである。つまり、道は違っても、目的地は同じなのである。

しかし、これらを一挙にやり遂げることは今の私の力に余ることである。それ故、今回は、全体計画の中の一部であることを自覚した上で、論文のテーマを、一つの小さな、しかし『賢者ナータン』の作品全体にとっては極めて重要な、中心的な問題、つまり、『賢者ナータン』の第三幕第七場に出てくる有名な三つの指輪の話に表れたレッシングの思想に限定し、それをドイツの思想的発展の中に位置付けて —— フォイアーバッハの『キリスト教の本質』(„Das Wesen des Christentums“), 『哲学の改革のための暫定的諸命題』(„Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie“) 『将来の哲学の諸根本命題』(„Grundsätze der Philosophie der

Zukunft⁴⁾へと発展していくドイツの宗教批判の思想史的発展の中に、レッシングのここでの思想を位置付けて、とはいえ、この場合も、現在の私にふさわしく、またそうすることが正しいと思っているから（ドイツの宗教批判はフォイアーバッハの宗教批判で本質的には終わるが故に）でもあるが、カントもヘーゲルもとりあえず捨象して、両者の思想的関係にのみ限定して——論ずることにしたい。

そして、このような方法論をとることで、レッシングの思想の全体像に少しでも迫ってきたい。この小論をそのための一つのステップとしたい。また、そうすることが、最初の問題提起——『賢者ナータン』の一般的理解としての寛容の概念の再検討とその克服、そして新しい独自の視点からのレッシングの思想の研究——に暫定的な答えを与える近道であろうと思う。

第一章『賢者ナータン』の成立過程

この劇詩の成立過程については、幾人かの研究者が述べていて、周知のことも多々あるが、三つの指輪の話を理解するうえで、前提として、是非とも必要なので、少し詳しく述べておきたい。

1772年2月13日、レッシングは『ヴォルフエンビュッテル大公図書館の秘蔵図書の中からの歴史と文学に寄せて』という寄稿を編纂し、出版する許可をブラウンシュヴァイク公から得た。それは検閲を免除された特別の許可であった。ただし、この場合、宗教と良俗に害を及ぼすものは印刷してはならないという但し書きがあった。1774年9月、寄稿『ヴォルフエンビュッテル大公図書館の秘蔵図書の中からの歴史と文学に寄せて』の第三号で、レッシングは、故ヘルマン・ザームエール・ライマールス教授（1694年～1768年）——彼の生前、レッシングは彼と友人でもなかったし、個人的な知合いでもなかった——の神学論文『神の理性的崇拜者のための弁護論もしくは擁護論』という手稿の一部（『理神論者の寛容について』）を、自分が図書館長をしているヴォルフエンビュッテル図書館の未見の稀覯本の中から発見したと称して、著者の名前を挙げずに公表した。以後、『無名氏の手稿の中からの数片』という題をつけて、ライマールス教授の遺稿を同誌上で次々と公表した。（注3）それらは、聖書の歴史的真实性もキリストの受難や復活も否定する過激な内容の論文であった。そのため、レッシングと無名氏は、正統派（ドイツの場合はルター派）の狂言者達の憎悪的になった。

ところで、レッシングによって突如話題の中心になったヘルマン・ザームエール・ライマールス教授はどんな人物だったのであろうか。彼は、非常に博學で敬虔な神学者であった。そして長い間、聖書の真理に対する沸き上がる疑念と真剣に格闘していた。しかし、彼の自由な精神は、次第にキリストの復活と聖霊の降臨に対して懐疑の目を向け、やがて新約聖書も旧約聖書とともに歴史的眞実ではなく、またキリストの受難も復活も使徒の単なる虚構に過ぎないという、当時としては極めてラディカルな宗教批判へとエスカレートしていった。その際、彼が唯一よりどころとしたものは、自らの理性であった。理性に合致しないものは、容赦なく切り捨てていった。しかし、彼自身は自らの論文の巻き起こす波紋を恐れ、今は発表する時ではないと判断し、後の世代の人達が神学的反動の攻撃に対して理論武装できるように（注4）、彼の原稿と内的葛藤の良心的で該博なメモのある証明書を書齋に隠しておき、

それらを彼の子供達に遺産として残しておいた。それらをレッシングが、彼の子供から預かり、前述のような手の込んだ設定をして、発表したのである。

レッシングの思想は、ライマールス教授の思想ともちろん同じではないが、レッシングは、ライマールス教授の論文を発表することで、公然たる神学論争が巻き起こり、真理の探求と啓蒙に少しでも役に立つであろうと判断して、彼の断片を公表したのである。「あなたとニーダーザクセンのすべての学校長達が私の無名氏に対して出陣していることに、私は何ら反対でないということを神は御存じです(=誓って申し上げる)。むしろ、私はそのことを喜ばしく思っている。なぜならば、非常に多くの人々が彼を検証にかけ、反論できるように、まさにその故に、私は彼を明るみに出したからである。・・・彼を公にしたことで、私は、あなたがあなたのすべての説教壇や新聞を用いて行なっているよりも実際多くの貢献を、キリスト教に対してしたと信じている。」(3)その際、彼は故人とその家族に被害が及ばないように、著者を無名氏として公表したのである。レッシング自身は、すべての学問の目的は真理の追求であり、それ故、権力の学問への介入を不当であり、いかなる強制も真理を求める魂に対する専制であると考えていた。

以上の経過を順を追って少し詳しくみると、1777年1月、レッシングは、『ヴォルフエンビュッテル大公図書館の秘蔵図書の中からの歴史と文学に寄せて』の第四号で、ライマールス教授の遺稿のうち五つの断片と彼自身の論文『人類の教育』の最初の53節および『編纂者の反論』を載せた。この年の秋から、ライマールス教授の断片を巡って、様々な正統派の牧師達がレッシングに対し、猛烈な非難と攻撃を公然としかけ、レッシングもこれに応え、レッシングと正統派の牧師達の間で熾烈な論争が始まった。

ハノーファーのリツェーウム神学校の校長、ヨハン・ダーニエール・シューマンの非難に対して、レッシングは、匿名の論文『精神と力の証明について』(1777年の秋に出る)と同じく匿名の論文『ヨハネの遺言』(1777年10月か11月に出る)を書いて、反撃を加えた。その際、レッシングは用心深く、双方とも出版社の名前を伏せて発表した。

1778年1月、ヴォルフエンビュッテルの地方監督、ヨハン・ハインリッヒ・レースの非難に対して、レッシングは、匿名の論文『第二訴答』(同年1月に出る)を書いて、反論した。この中で、レッシングは、「ある人が所有している、もしくは、所有していると思ひ込んでいる真理ではなく、その人が真理を認識しようとして注いだ誠実な努力が人間の価値を造り上げるのである。なぜならば、真理の所有によってではなく、真理の探求によって、人間の諸力——この中にのみ人間のますます豊かになっていく完全性が存するのである——は大きくなるからである。所有は(人間を)無為に、怠惰に、高慢にさせる。」(4)と述べている。これに、有名なパラベル「もし神が右手に全真理を持ち、左手には、永遠に誤謬を繰り返すという補足を付けたうで、真理への止むことなき衝動を隠し持っていて、私に『選べ!』と言われたならば、私は神の左手に謙虚にひざまずき、『父よ、与え給え!純粋な真理はやはりあなただけのものなのですから!』と言うでしょう」(5)が続く。論争から生まれた、これらの美しい金言は、レッシングの姿勢、生き方、思想を最もよく表わしたものと言えよう。

1778年の春になって、いよいよ大物が登場してきた。ハンブルクのカターリネン教会の主任牧師で、ハンブルク時代からのレッシングの知人でもあったヨハン・メルヒオル・ゲーツェ(1717年~1786年)である。彼は信仰篤き牧師というよりも、リヒテンベルクの言葉を借

りれば、「彼の説教相手の髪の毛をつかんでも天国へ引きずって行く」ほどの強力な折伏をするタイプの狂信家であった。彼はすでに1777年の末頃から、ライマールス断片とその編纂者を論難するいくつかの著作を発表していた。これらに対して、レッシングは『ある例え話。（1778年1月に書く）小さな願い（1778年1月に書く）とハンプルクのゲーツェ牧師殿への、場合によっては起こりうる絶縁状（1778年2月に書く）とを添えて。』（1778年3月に、出版社の名前を伏せて、匿名で出る）と『諸公理、そのような様々なことのなかにそれらがあれば。（Axiomata, wenn es deren in dergleichen Dingen giebt.）ハンプルクのゲーツェ牧師殿に抗して。』（1778年1月に書き、3月中旬に匿名で出る）を書いて、ゲーツェを論駁していた。これらに対して、ついに怒り心頭に発したゲーツェは、1778年の復活祭頃から編纂者のレッシングに的を絞って、猛然と襲いかかってきた。『われわれの至聖の宗教とその唯一の教義の根拠たる聖書とに対する、宮廷顧問レッシング殿の直接的、間接的な、敵意ある攻撃に対するある暫定的なこと』（1778年の復活祭前頃に出る）そして三部作の『レッシングの弱点』（第一部は1778年4月24日に、第二部は第八反ゲーツェ論後に、第三部は八月頃に出る）を書いて、レッシングを攻撃した。レッシングは、4月初旬に、第一反ゲーツェ論を書き、「反ゲーツェ（ゲーツェへの反論）から正式の週間論文が生まれることになろう・・・」（6）と論争の続行を宣言した。そして4月から7月初旬までの間に、それらの中の11篇を発表した。これが世界で最も美しい論争文学の一つである、レッシングの有名ないわゆる『反ゲーツェ』論である。正式には、『反ゲーツェ、すなわち、ゲーツェ牧師殿の自発的寄稿に対するやむを得ない寄稿』である。「論争はあらゆる色彩に輝き、煌めいている。音階は、優しい友情から、あからさまな侮蔑、人を刺し殺すような風刺、ルター的な粗野、外交的な繊細さ、情熱的な厳粛さまで、さらには最も激烈な憤激にまで至る。」（7）

論争の最中の1778年5月、レッシングは、ライマールス教授の最も強烈な内容の断片『キリストと彼の弟子たちの目的について』を、編纂者の前書きを付けて、特別論文として、発表した。

レッシングに対する正統派の数多くの狂信者達の攻撃は、人身攻撃も含む、汚く情け容赦のないものであった。しかし、攻撃された者の美しい答弁によって、小さな町ヴォルフエンビュッテルと恐れを知らない真理探求の闘士は、全ドイツの耳目を集め、反響は大きくなった。そして大物ゲーツェを登場させたにもかかわらず、レッシングに対してはあまり勝ち目はなかった。正統派の牧師達の旗色が悪くなると、彼らは裏から手を回し、ブラウンシュヴァイク公を動かし、レッシングに圧力をかける策略に出た。彼らは、ヴォルフエンビュッテルからレッシングを追放せよと要求した。ゲーツェはレッシングの著作活動を禁止せよと迫った。レーゲンスブルクの帝国議会も介入してきた。

レッシングは、1772年2月13日に検閲免除の特権を与えられていたが、1778年7月6日、ついに、その特権を取り消す旨のブラウンシュヴァイク公の勅令が、ブラウンシュヴァイクのヴァイゼンハウス書籍商の社長宛に出された。レッシングは、これまで、その書籍商から『ヴォルフエンビュッテル大公図書館の秘蔵図書の中からの歴史と文学に寄せて』や神学論文や論争文を出版していたので、その勅令は、レッシングの論争続行を事実上禁止するものであった。7月11日、レッシングは大公宛に書簡を出し、『反ゲーツェ』論を勅令の条項の例外としてくれるように嘆願した。そして、自分の反ゲーツェ論文がもし押収されるようなことがあれば、辞表を提出するとの意向を伝え、ゲーツェに対する論争だけは、自国で出版

が禁止された場合、外国で印刷してでも、断固としてやりぬく決意を固めた。

7月13日、大公は、レッシングに書簡を出し、『無名氏の手稿の中からの断片』の原稿を、検閲免除に関する免除文書と一緒に、提出するように命令を下した。そして、最後の断片『キリストと彼の弟子たちの目的について』をすべて押収せよとの内容の勅令を、ブラウンシュヴァイクの高官とヘルムシュテットゥ大学の評議委員会とに出した。

レッシングは、7月20日、検閲免除の文書とライマールス原稿を大公宛の書簡と一緒に提出し、改めて、自分自身の論文を押収からはずすこと、および、反ゲーツェ論文をこれからも検閲なしに、ヴァイゼンハウス書籍商で印刷させてくれることを請願した。

しかし、8月3日、ついに、レッシングの言論を封ずる大公の決定が下された。それは、レッシングの公表する著作は、彼自身のものであれ、他人のものであれ、すべて、今後は検閲をパスしなければならないというものであった。さらに、レッシングを宗教裁判にかけて、処罰するとの脅迫も行なわれた。

大公が露骨な言論弾圧にでた以上、レッシングはもうこれ以上、正面切って神学論争を行なうことができなくなった。『反ゲーツェ』論の第十二弾も、書き始めていたにもかかわらず、途中で断念せざるをえなかった。そこで、レッシングは、やむなく、昔の「説教壇」たる劇場に帰って、自己の思想を展開することにしたのである。「私の古くからの説教壇で、つまり、劇場で、今なお、少なくとも何の妨げもなく、私に説教させてくれるかどうか、試してみなくてはなりません。」(8)というレッシングの言葉がそれを裏付けている。また別の書簡でも、『賢者ナータン』のことを、レッシングは「その内容は、私の現在の論争との一種の類似である」(9)と述べている。そこには、権力がいかに弾圧しようとも、真理のための闘争は断固としてやりぬくという、レッシングの静かながらも不屈の闘志がにじみでている。このようにして、『賢者ナータン』が生まれたのである。1779年4月下旬(出版)のことである。まさに論争が『賢者ナータン』の産婆役であったと言えよう。

『賢者ナータン』と同じ頃、それと相並んで、『反ゲーツェ』(1778年7月初旬までにすべてが公表される)、『人類の教育』(1780年4月出版)が生まれた。これら三つの作品は、独立したものであるが、内容上も誕生の経緯の上でも、三位一体のものである。これらをレッシングは想像を絶する困難な個人的状況の中でやり遂げた。極度の窮乏、生活条件改善の闘い、母の死(レッシングは1777年3月8日付の姉の手紙で初めて母の死を知る)、日向に寝転がって過ごさなければならない程の病気の悪化と肉体的、精神的衰弱、病気よりもひどい精神的無気力感、等々。さらに、レッシングは、47歳にして初めて結婚(1776年10月8日)したが、それも束の間の幸せで、翌年の男の子の誕生の喜びもたった1日しか続かず、誕生の24時間後にはその子は死んでしまった。そのうえ、最愛の妻エーファ・ケーニヒも非常に困難な分娩のため、その子を産んだ後、無意識状態が絶え間なく続き、その1ヵ月後には死んでしまった。しかし、上記の三つの作品には、これらの異常に困難な個人的状況の影は、少しも見られない。驚くべき意志力、精神力である。

波乱のなかで、様々な困難にもかかわらず、やっと日の目をみた『賢者ナータン』も1779年5月28日には、「宗教に関する極めてスキャンダラスな内容」のために、フランクフルトゥ・アム・マインで、早くも禁止されてしまった。ザクセンとオーストリアでも禁止された。「私の作品は、われわれの今の黒衣の僧とは何の関係ありません。そして、私は、やはりなんといっても、私の作品を一度上演したいのです。そのための道を自分から逆茂木で塞ぐ

ようなことはしたくありません。その上演がたとえ100年後になって初めて実現しようともです。あらゆる啓示宗教の神学者達は、内心では、もちろんそのことを罵るでしょうが、公然とそれに反対することは、恐らく彼らとて思い止まるでしょう。」(10)というレッシングの非常に強い希望にもかかわらず、彼の生前には、ついに上演されなかった。しかし、レッシングはそのことを十分予測していたのであろうか。「今でもこの作品が上演できるような場所は、ドイツにはまだないと思う。しかし、それが最初に上演される場所に救いと幸いあれ。」(11)と述べている。

1783年4月14日、『賢者ナータン』が、デッ布林劇団によって、ベルリンで初めて上演された。しかし、ナータンの役は、主演男優のデッペリンには荷が重すぎて、失敗に終わった。1801年11月28日、シラーは『賢者ナータン』を改作し、ヴァイマールで上演した。これ以後、『賢者ナータン』はドイツの舞台の上演計画に恒常的に取り入れられることになった。しかし、ナチスの時代に、レッシングの作品は、焚書の対象になり、『賢者ナータン』は12年間にわたって、ドイツから追放された。『賢者ナータン』波乱の運命である。

第二章 三つの指輪の話

『賢者ナータン』に、奇跡を呼び起こす不思議な力を秘めた宝石をちりばめた三つの指輪の話が出てくる。この話は、この劇のハイライトとなっている。(注5)それはナータンが賢者であることを、ナータンの美しくてすばらしい智恵を遺憾なく発揮している。それを聞いた人はだれしもその思想の深さ、思想の美しさ—— そうだ。まさに思想の美しさである。しかも『賢者ナータン』の美しさの核心は、キャラクターの行為の美しさでもなく、文学としての言葉の美しさ、リズムの美しさ、詩の美しさでもない。形象化された思想の美しさでもない。『賢者ナータン』は、思想そのものをストレートに説教している。智恵の披露である。そういう説教としての思想が美しくそして感動的になりうるものであろうかという疑問を、現実に、完全に打ち消した極めて稀な劇作品である—— に衝撃的な感動を覚えずにはおれないであろう。(注6)この思想に少しでも迫ることが本稿の目的である。

林達夫氏の紹介やエーリッヒ・シュミットゥの研究によると、三つの指輪の話は、最も古い、最も純粋な比喩の形態から始めて、それらを列挙すれば、『ユダヤ古伝集』、エティエンヌ・ドゥ・ブルボン作の『聖霊の七つの賜について』、作者不明のフランスの小詩『まことの指輪の唄』、イギリスの通俗物語集『ローマ人事蹟』、イタリアの通俗物語集『古譚百種』、作者不明のイタリアの歴史小説『冒険的なチチリア人』、有名なジョヴァンニ・ボッカチオの『デカメロン』などがある。バリエーションも含めると、数はもっと多い。

これら全部を一つ一つ比較、検討すれば、レッシングの三つの指輪の話の特徴は、非常にはっきりしてくるであろうが、われわれのテーマとの関係では、その必要はないであろう。『デカメロン』の三つの指輪の話との比較、検討だけで十分であろう。その理由は以下の通りである。レッシングは、三つの指輪の話を、彼自身が述べていることでもあるが(注7)、直接的には、ボッカチオの『デカメロン』の三つの指輪の話にヒントを得て創作した。もちろん、レッシングは、この種の話—— 傾向的なものも含めて—— いろいろ研究して知っていた。にもかかわらず、彼はそれらの中からわざわざボッカチオの『デカメロン』の三つの指輪の話を好んで選んだのである。これが第一の理由である。また、一般的に言って、あ

る対象の本質は、それに最も類似した対象との区別と差異によって明らかになるが、『賢者ナータン』の三つの指輪の話は、『デカメロン』の三つの指輪の話と最もよく似ている。これが第二の理由である。そこで、われわれは、主として『デカメロン』の中の三つの指輪の話と比較、検討することによって、『賢者ナータン』の中の三つの指輪の話に表れたレッシングの思想を明らかにしていくことにする。

第一節

ボッカチオの『デカメロン』の三つの指輪の話は、初日の第三話（「ユダヤ人メルキセデックは三つの指環の話をして、サラディノの企んだ大きな危険を免れる。」）に出てくる。

その要旨は次の通りである。訳文は、岩波文庫『デカメロン』の野上素一氏の訳による。

バビロニアの帝王サラディノは金策に困り、アレクサンドリアで高利貸しを営んでいる金持の吝嗇のユダヤ人メルキセデックから、権力を用いずに、金を借りるために、次のような質問をして、彼をはめようとした。「えらい男よ、わしは多くの人から、きみは実に聡明で、信仰のことにかけては大層知識があると聞いている。そこで、ユダヤ教、回教、キリスト教、此の三つの律法のうちで、どれが真実だと考えるか。ぜひ知りたいと思うのだが。」すると、メルキセデックは、サラディノの手に乗らないように、思案の末、言葉尻を捉えられないようにして、次のように答えた。「昔一人のえらい金持の男がございました。貴重な宝石をたくさん持っている中に、一つ特別に美しい高価な指環がありました。その値打ちと美しさのためにそれを誇りとして、いつまでも代々の相続人に伝えようと思いました。それ故に、彼の息子の中の誰でも、この指環を譲り受けた者は、彼に伝えられたのだから、彼の相続人となり、他の者から家長として尊敬と奉仕を受けるべきだと命じました。

彼に指環を譲られた息子は、同じようにして子孫に伝え、今度は自分が先祖として同じように命令を伝えました。また子孫たちも先祖の通りにいたしました。要するに、指環は幾代もの間手から手へと移りまして、最後にそれを手に入れた男には三人の息子があって、三人とも皆男ぶりがよくて、勇敢で父親に孝順でありました。それで、父親も三人を同じように愛していました。息子たちは、指環の由来を知っていましたし、皆いずれも、我こそ誰よりも尊敬されたいと望んでいましたので、既に老年なる父親にせがんで、死ぬ時には自分に指環は譲っていただきたいと懇願いたしました。父親はどの息子をも同じように愛していたので、・・・三人全部の満足するように、みんなにやるような約束をしようと考えました。それで秘かに巧みな細工師に別の指環を二つ造らせ、いずれも第一のものと同じで、造らせたもの自身でさえ、どっちが真物だか見分けがつかないほどでございました。死に臨んで彼は秘かに三人の息子の一人一人にそれを与えました。父親の死後、息子は各々相続権と家長権を得たいと思い、互に相手を否定して、自分こそ正当の権利を主張し得る証拠としてそれぞれ指環を持ち出して見せました。ところが指環はどれも全く同じなので、どれが真物だか全くわかりませんでした。誰が父親の真の相続人であるかの問題は後に残り、今日まで解決を見ないでいます。

それで、陛下、私に与えられました問題、即ち、父なる神によって三つの民族に与えられた三つの律法に就きましても、同様なことが申されます。各民族いずれも、その相続権、その真の律法、その戒律を持っていると信じています。しかし、誰が一体実際にそれを持っているかは、指環の問題と同じく、未解決のままでございます。」

サラディノは、自分の懸けたわなをそのユダヤ人が巧みに逸らしたため、今度はあけすけに金を無心した。ユダヤ人の方も進んで金を用立てしました。サラディノは後に全額を返済し、外に多くの贈物をして、彼を友人として待遇し、自分にすぐ次ぐ高い地位と名誉を与えました。

第二節

さて、今度は『賢者ナータン』の三つの指輪の話を見てみよう。

イスラム教徒ではあるが、ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教に対しても、寛容であって、貧しい人々に喜んで施しものをする寛大な王様（スルタン）サラディンは、ユダヤ教徒のユダヤ人ナータンから金を借りることによって、国家財政の破綻を建てなおそうとする。そこで、妹のシッターと相談して、ナータンから金を巻き上げるためのある策略を考えだす。それは、賢人であるナータンに難問をふっかけ、窮地に追い込んで金を脅し取ろうというものであった。

サラディン：「・・・猫被りをしなければならぬ。不安に落とし入れ、罠を仕掛け、窮地に誘い込まなければならぬ。・・・金をうまく取り上げるために。金を！ユダヤ人を脅して金を、金を巻き上げるために。金をだ！ついにこんなつまらない策略を弄するまでになった。下らないものの中でも最も下らないものを工面するために。」

シッター：「・・・この罠は、ただ貪欲で、用心深く、臆病なユダヤ人に向いているだけであって、善良な人や、賢明な人には向いていませんもの。そのような人は、罠など仕掛けなくても、そのままですでにわたくしたちの味方ですもの。そのうえ、そのような人がどのようにして言い逃れをするか、聞く楽しみもありますわ。どのように大胆な強みを発揮して、罠の縄を苦もなく断ち切るか、それとも、どのようににずる賢く用心して、網を潜り抜けていくか、これを聞く楽しみもお兄様にはありますのよ。」

ナータンを宮殿に呼び、サラディンはいよいよこの策略を実行に移す。

サラディン：「お前は大変賢明なのだから、どの信仰、どの戒律がお前に最も納得がいったのか、ひとつわしに言ってみてくれ。」

ナータン：「スルタン様、私はユダヤ人です。」

サラディン：「そしてわしはイスラム教徒だ。われわれの間にはキリスト教徒もいる。これらの三つの宗教の中で、真の宗教はやはり一つしかありえない。お前のような男が、たまたま生まれついた所の宗教をそのままじっと信じている訳はあるまい。もしそうだとしたら、見識を持って、なんらかの根拠から、より良い宗教を選択してのことであろう。さあ、それなら、お前の見識をわしに話してくれ。その根拠をわしに聞かしてくれ。・・・その根拠に基づく選択をわしに教えてくれ。」

ナータンはしばらく考えた後、次のように語る。

ナータン：「しかし、スルタン様、私の心の内をすっかり打ち明ける前に、ちょっとした話をするをお許し下さいませんか。」

ナータン：「むかしむかし、東方に一人の男が住んでおりました。この男は、大切な人からもらった、計り知れない価値のある指輪を持っておりました。その宝石はオパールで、非常に多くの美しい色に輝いておりました。そして、その宝石には、秘密の力があまして、この力を堅く信じて指輪をはめておる者は誰でも、神と人間に愛されるということでした。

それ故、東方のその男が、この指輪を片時も指から離さず、それを永久に自分の家に保存しておくための家法を作ったとしても、何の不思議がございましょうか。つまり、それはこういうものでした。彼は自分の息子達の内でも最愛の者にその指輪を譲り渡し、そして、その息子がまた彼の息子達の内でも最愛の息子にその指輪を遺贈すること、そして誕生の先後にかかわらず、常に最愛の息子が、専らその指輪の力によって、その家の頭、家長になることというふうに定めたのでした。私の話がおわかりでしょうか、スルタン様。」

スルタン：「わかっておる。先を話せ。」

ナータン：「このようにして、この指輪は、息子から息子へと受け継がれていき、最後に三人の息子をもつ父親の所に行き着きました。この息子達は、三人とも同じように父親に従順でしたので、父親の方も、息子達を三人とも同じように愛さずにはおれませんでした。ただ、ときどき、息子達一人一人が別々にその父親と二人きりになって、他の二人が父のあふるばかりの胸の内を共有することができなかった時には、たちまち、眼前にいるこの息子こそあの指輪を受け継ぐによりふさわしいと思えたり、また別の同様の時には、眼前にいる二人目の息子こそそれによりふさわしいと思えたり、また別の時には、眼前にいる三人目の息子こそよりふさわしいと思えました。実際また、この父親は、お人好しの気の弱さから、三人それぞれに指輪を遺贈することを約束しました。それはそれで何とかなりました。しかし、臨終の時がやってきました。そして、その善良な父親は困ってしまうのです。その父親は、自分のした約束を信じている息子達の内での二人の感情を害してしまうことに心を痛めるのです。どうしたらいいものなのかと。彼は、秘かにある技工士のところに使いを遣り、自分の指輪を手本にした指輪を別に二つ注文し、それらを自分の指輪と同じように、否、まったく同じように作ってほしい、そのためには、金も努力も惜しまないようにと命ずるのです。その技工士は見事にやり遂げるのです。彼がその指輪を父親のところに持ってきた時、その父親でさえ元の指輪がわからないのです。嬉しさ余って、彼は息子達を別々に呼び、それぞれ別々に祝福の言葉とともに指輪を渡して、そして、死んでしまうのです。・・・」

.....

ナータン：「・・・その後起こることは、おのずと明らかです。父親が死ぬや否や、めいめいが自分の指輪を持ってきて、自分こそ家長であると言い張るのです。調べたり、言い争ったり、裁判に訴えたりしますが、無駄です。真の指輪は証明できませんでした。今のわれわれの問題であります真の信仰もこれと殆ど同じで、証明できないのです。」

スルタン：「何だって？こんなことでわしの問いに対する答えとしようというのか。」

ナータン：「父親が、三つの指輪を区別することができないように作らせたのだから、わたしのような者には、とてもそれらを区別するだけの勇気がございせんといふことの弁明にはなるかと思いますが。」

スルタン：「指輪だと！わしを愚弄するな！わしがお前に挙げた宗教は、やはり区別がつくと思っておる。衣服や飲食物にいたるまで、区別がつくではないか。」

ナータン：「ただ、宗教の根本という面からみますと、そうではございません。と申しますのも、すべてが歴史にその根を持っているのではないのでしょうか。書かれたものにせよ、伝承されたものにせよ！そして、歴史というものは、やはり全く頭から信用して（誠意と信用を基礎として）受け入れなければなりませんね。間違っているのでしょうか。ところで、一体人は、誰の誠意と信用を全く疑わないのでしょうか。やはり何といっても、自分の民族のも

のではないのでしょうか。やはり私達と血のつながりのある人々の誠意と信用ではないのでしょうか。そして、何ととっても、幼少の時から、私達に愛の証を示してくれ、欺かれるほうが私達のためになる場合以外は、決して私達を欺いたことのない人々の誠意と信用ではないのでしょうか。あなた様があなた様の御先祖様（お父様方）のことを信じていらっしゃるよりも、私が私の先祖（父親達）のことを信ずる気持ちの方が少ないというようなことがありますでしょうか。逆もまたしかりです。私の先祖に矛盾したくないばかりに、あなた様に、あなた様の御先祖を嘔吐き呼ばわりするように、私が要求することができるでしょうか。逆もまたしかりです。これと同じことがキリスト教徒についても言えるのでございます。そうではありませんか。」

サラディン：「(確かにその通りだ！この男の言うことは正しい。黙っておかざるをえない。)」

ナータン：「もう一度、先程の指輪の話にもどらせていただきます。先ほど申し上げましたように、その息子達は、互いに告訴しあいました。そして、めいめいが、指輪は父の手から直接頂きましたと、裁判官に誓いました。全くその通りではあります。それも、すでに長い間にわたって、父親から、いつの日かお前が指輪の特権を受けることになるのだ、という約束をしてもらっていた後に、頂いたのですと誓いました。これもそれに劣らず真実です！三人はそれぞれに、父が自分に嘘を言った筈がない、父に対して、あんなにも大切な父に対して、そのような猜疑心を抱くくらいなら、常日頃は兄弟達の最も良いところだけを喜んで信ずるにやぶさかではないが、兄弟を詐欺的行為のかどで非難せざるをえないし、必ず裏切者を見つけ出して、是非復讐してやりたい、と断言しました。」

サラディン：「そして、裁判官は？お前が裁判官にどう言わせるか聞きたいのだ。さあ、言え。」

ナータン：「裁判官は次のように言い渡しました。『もしお前達が今すぐに父親をここに出廷させるのであれば、私はお前達に退廷を命ずる。お前達は私が謎を解くためにここにいるとも思っているのか。それとも、本当の指輪が口を開けるまで待っておるのか。しかし待ちなさい。本当の指輪には、愛を受ける奇跡の力、神と人間に愛されるという奇跡の力があるということを確認に私は耳にした。これが判決を下さなければならない！なぜならば、偽の指輪には、その力が絶対がないからである。ところで、お前達二人が最も愛しているのは誰だ。言ってごらんさい。告げなさい。お前たちは黙っているのか。(お前達の)指輪は後向きにしか力を出さないのか。外に向かつては力を発揮しないのか。めいめいが、ただ自分自身だけを一番愛しておるのか。おお、それでは、お前達は三人とも皆、詐欺にかかった(偽物を掴まされた)詐欺師だ。お前達の指輪は、三つともすべて本物ではない。おそらく、本当の指輪は紛失したのであろう。父親は紛失したことを隠し、その埋合せをするために、一つではなく、三つ作らせたのだ。』」

スルタン：「すばらしい！見事だ！」

ナータン：「裁判官は続けて次のように言いました。『そこで、私は判決を下すかわりに、忠告を与えようと思うが、お前達がもしそれを望まないのであれば、すぐに退廷してよろしい。しかし、私の忠告というものは次のようなものだ。お前達は、事態をまったくあるがままに受け取ることだ。お前達めいめいが、父親の指輪を持っているのであれば、めいめいが自分の指輪こそ間違いなく本物だと信じなさい。父親が、いまや家の中の一つの指輪の専制に耐えきれなくなったということもありうる。そして、確かなことは、父親がお前達三人す

べてを愛していたこと、しかも、一人をひいきして、他の二人を苦しめたくないが故に、同じように愛していたことである。さあ！父親の清廉な、偏見のない、自由な愛を倣おうとめいめいが熱心に努力するがよい！お前達めいめいが、指輪の宝石の力を顕現させる競争において、努力するがよい。柔和な心、心から人と仲良くやっていくこと、善行、心底からの神への帰依によって、その力の顕現を促すがよい。そして、それからお前達の（はるか先の）子孫の代になって宝石の力が顕れたならば、何万年以上も先のその時に、私はお前達を再びこの裁判官席の前に召喚することにする。その時には、私よりも賢い人がこの裁判官席に座っていて、判決を下すであろう。退廷しなさい！と。」その思慮深い裁判官はこのように言ったのです。」

サラディン：「おお、神よ！」

ナータンの知恵のすばらしさ、思想の美しさに圧倒されたサラディンは、ナータンのところへ駆け寄って、手を取り、友人になって欲しいと頼む。

註

- (1) このドラマの名称が Ein dramatisches Gedicht となっていて、一般に用いられている Komödie とか Lustspiel という語も、ましてや Tragödie とか Trauerspiel という語も使われていないことについては、それなりの由来と意味があり、それを巡って論争も行なわれているところでもあるが、この論文のテーマと直接関係ない問題であるので、ここでは、それも『賢者ナータン』論の中の一つの部分的研究テーマであるということだけを示唆しておいて、これ以上は触れないでおく。
- (2) ここで、思想史の発展に限定し、文学史に触れていないのは、文学史の場合、西洋の宗教批判の思想史的発展に照らしてみても、それが発展と言えるかどうか疑問だからである。こういう扱いをしたからといって、それが、文学史の研究や、また作家と作家の、作品と作品の関係の研究を軽視してもよいということを意味しないのはもちろんのことである。それが極めて重要であることは、例えば、レッシングとシェイクスピア、レッシングとデイドロ、レッシングとゲーテ、シラー、ブレヒト等の関係一つをとってみても明らかである。このような文学史的な研究は、作家と作品の強い独立性を考慮すれば、また、ロシア文学の余計者の形象のような継承関係がドイツ文学に欠如していることを考慮するならば、『賢者ナータン』を総体として研究することの中に含めた方がよいと思う。
- (3) レッシングは、できることならば、ライマールス教授の論文全体を整理して、一冊の本として出版したかったが、様々な困難に遭遇し、印刷することができなくなった。そのため、彼の論文を断片として逐次公表する手段に訴えたのである。
- (4) ライマールスの期待したとおり、後に、ヘーゲル学派のダーフィットゥ・フリードゥリッヒ・シュトラウスが再びライマールスに注目し、衝撃的な聖書批判の書『イエスの生涯』(1835年)を著わした。これはヘーゲル学派の左右分裂の契機となった書物である。
- (5) ところが、この三つの指輪の話は、一見したところ、劇全体のテーマを総合し、締め括るように思えるにもかかわらず、劇の結末ではなく、五幕の第三幕第七場に出てくる。それはなぜか。この問いには、五幕の劇構成全体の中で、この箇所を持つ意味を考えたと、劇全体として何を訴えようとしているのかを考えることなしには答えることはできないであろう。この問題も、本論のテーマと直接関係しないので、ここでは、次のような簡単な指摘にとどめておきたい。すなわち、レッシングが、この劇で、劇としての最大限の効果を狙ったこと、換言すれば、意外な、感動的な、劇的なハッピー・エンドを狙ったこと、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教間の敵対、迫害、闘争ではなく、三者の（未来における）共存、融和が可能であること――

宗教的結合に人間的結合が勝ること、宗教愛に偏見なき人間愛が勝ること——、それを、劇ゆえに、キャラクターの融和において示そうとしたこと、しかも、ナータンの精神において、初めてそれが可能であることを示そうとしたこと、等である。

- (6) このことは、作者のレッシング自身が「それは、戦場を嘲笑しながら去って行くような作品には決してならない。それは、これまでに私の作ったものの中で、最も感動的な作品になる。」⁽¹²⁾と述べていることとも符合するが、それにしても、レッシングは、この作品に対して、余程の自信があったのであろう。
- (7) レッシング自身の証言をここで二三引用しておこう。「確かに、私は予告段階の私の脚本の実際の内容をあまり早く知られたくない。しかし、お前やモーゼスがそれを知りたいと思うならば、ボッカチオの『デカメロン』の第一日、第三話のユダヤ人メルキセデックの話を読むとよい。私は（それから）非常に興味のある一つの挿話を創作したと思っている。」⁽¹³⁾「…予告のことを私の友人達の一部は驚くであろう。しかし、もしあなたがボッカチオの『デカメロン』の第一日第三話で、私の劇の元となる予定のユダヤ人メルキセデックの話を読まれるつもりならば、その鍵を簡単に見つけることができるでしょう。」⁽¹⁴⁾「ナータンのための最初の思想を私がボッカチオの『デカメロン』の中に見いだしたということは確かに本当ですし、それを、私は私の友人の誰に対しても隠し立てしたことはありません。劇作品の非常に豊かなこの源泉、つまり、第一巻の第三話が、私の場合、ナータンが生長してきた胚子であることも確かです。」⁽¹⁵⁾「ボッカチオの場合（第一日第三話）、メルキセデックと呼ばれていますが、その人がナータンなのです。」⁽¹⁶⁾

引用文献

- (1) Johann Wolfgang von Goethe: Weimarisches Hoftheater, Johann Wolfgang Goethe Herausgegeben von Ernst Beutlet Artemis-Verlag Zürich, 28. August 1949 Vierzehnter Band S.65
- (2) Wolfgang Drews: Gotthold Ephraim Lessing in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten Veröffentlicht im Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, August 1962 S.138
- (3) G.E.Lessing: Anti-Goeze, Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967, Dritter Band S.447
- (4) G.E.Lessing: Eine Duplik, a. a. O. S.321
- (5) G.E.Lessing: Eine Duplik, a. a. O. S.321-322
- (6) Der Brief von Lessing an Johann Albert Heinrich Reimarus Wolfenb., den 6. April 1778
- (7) Cf. (2) S.127
- (8) Der Brief von Lessing an Elise Reimarus Wolfenb., den 6. September 1778
- (9) Der Brief von Lessing an Karl Lessing Wolfenb., den 11. August 1778
- (10) Der Brief von Lessing an Karl Lessing Wolfenb., den 7. November 1778
- (11) G.E.Lessing: Bruchstück einer Abhandlung [Winter] 1778/79
- (12) Der Brief von Lessing an Karl Lessing Wolfenbüttel, den 20. Oktober 1778
- (13) Cf. (9)
- (14) Cf. (8)
- (15) G.E.Lessing: Bruchstück einer Vorrede. [Winter] 1778/79
- (16) Der Brief von Lessing an Johann Gottfried Herder Wolfenbüttel, den 10. Jenner 1779

参考文献

- (1) Renate Klar und Kurt Wölfel: Lessings Leben und Werk in Daten und Bildern Insel Verlag 1967
- (2) Karl S. Guthke und Heinrich Schneider: Gotthold Ephraim Lessing J.B. Metzlersche Verlags-

buchhandlung und Carl Ernst Poeschel Verlag GmbH in Stuttgart 1967.

- (3) Gotthold Ephraim Lessing in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten Dargestellt von Wolfgang Drews Veröffentlicht im Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, August 1962
- (4) Heinrich Schneider : Lessing Zwölf biographische Studien mit 4 Tafeln Verlag „Das Bergland-Buch“ Salzburg 1950
- (5) Erich Schmidt : Lessing. Geschichte seines Lebens und seiner Schriften. 2 Bde. Berlin 1884-1892
- (6) Wilfried Barner und Gunter Grimm : Arbeitsbücher für den literaturgeschichtlichen Unterricht Verlag C. H. Beck München 1975 Dritte, neubearbeitete Auflage 1977
- (7) Paul Rilla : Lessing und sein Zeitalter Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1968
- (8) Lessings Werke Herausgegeben von Kurt Wölfel Insel Verlag 1967
- (9) Gotthold Ephraim Lessing Gesammelte Werke Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1968
- (10) 林達夫著『文芸復興』, 飛鳥新書, 1947年